

# CorroMag.

演劇発表会に  
でよう!



ワークショップ・レポート

世田谷パブリックシアター演劇部  
中学生の部 第一期 2015／2016

# (『キャロマグ』ってなに?)

三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」(600席)と「シアタートラム」(200席)という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、その活動は劇場での上演活動に留まりません。3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャー或は演劇ワークショップを行っています。キャロマグ(CarroMag.)は、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。



# CarroMag.

Vol.10 | Jan.2017

## CONTENTS

### ワークショップ・レポート

## 世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部 第二期 2015/2016

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| はじめに                            | 2  |
| 世田谷パブリックシアターの中学生演劇部が区大会に出るって?   |    |
| 恵志美奈子(世田谷パブリックシアター学芸)           |    |
| 座談会                             | 4  |
| 学芸スタッフが語る、劇場に中学生演劇部があることとは?     |    |
| 部員レポート                          | 10 |
| 演劇を体験して感じたこと                    |    |
| まさる(「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」参加者) |    |
| 中学生の話し合いはいい線をいく                 |    |
| まや(「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」参加者)  |    |
| 進行役レポート                         | 12 |
| 中学生をダメてはいけない                    |    |
| 金谷奈緒(演出家/青山ねりもの協会)              |    |
| ワークショップの概要(2015/2016)           | 14 |
| CarroMag. Information           |    |
| 近日開催予定の主なイベント・ワークショップ           | 16 |
| 学芸スタッフから                        |    |
| おまけマンガ『たまにはこんな役 #10』            |    |
| 編集後記                            |    |

### CarroMag. Information

- 近日開催予定の主なイベント・ワークショップ ..... 16
- 学芸スタッフから
- おまけマンガ『たまにはこんな役 #10』
- 編集後記

# 世田谷パブリックシアターの 中学生演劇部が 区大会に出るって？

恵志美奈子（世田谷パブリックシアター学芸）



今回のキャロマグで特集するのは、中学生を対象にした演劇ワークショップ「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部 第二期」です。毎年、9月から10月末あたりまでの2ヶ月程にわたって行う活動で、10日ほどのワークショップを通して20分程度の作品を創作し、世田谷区立中学校演劇発表会、いわゆる区大会で発表しています。

と、あたりまえのことのように書いていますが、世田谷パブリックシアターは世田谷区の公立劇場とはいえ、あくまでも区内公立施設すぎません。その劇場のいち事業である「演劇部」が、区内中学校の演劇部と肩を並べて区大会に出場しているというのは、少し変な感じもしませんか。

そもそも、私たち演劇部が区大会に出場するようになったのは、区大会を開催している世田谷区立中学校教育研究会演劇教育研究部（世中研）との2008年頃からの関わり——演劇部が

ない区内中学校に演劇部を立ち上げるお手伝いのほか外部指導員の派遣、区立中学校の演劇部の生徒を対象にした夏期ワークショップの開催、区大会における技術協力など——にあります（経緯の詳細は、キャロマグ6号の特集「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」の「世田谷パブリックシアター演劇部ができるまで」をお読みください）。

ある日、世中研のミーティングで、世田谷パブリックシアター演劇部も区大会に出場できるかを聞いてみたところ、学校に演劇部のない子たちが行ける場として、劇場が機能してくれているわけですから問題ないと、その場で了承をいただいたのが始まりでした。

その時、すんなりとゴーサインがでたことに驚きを覚えましたが、学習指導要領を紐解けば、そもそも中学生（そして高校生）の部活動は、各教科の授業や特別活動などの教育課程に位置づけられない、「生徒が自主的・自発的に行う

活動」です。それが「学校教育の一環」と位置づけられたのも、平成20年に現行の学習指導要領がだされてからのことです。それまでは「教育課程外の活動」にすぎませんでした。つまり、学校主導の部活動は慣行にすぎないのですが、慣行になっているからこそ、劇場の部活動が区大会に出場することに、一瞬、違和感が生じるというわけです。しかし、学校の教育課程を離れて、「生徒が自主的・自発的に活動するのが部活動だ」という前提に立つのであれば、地域の劇場が演劇部という場を提供し、その有志活動が区大会に出場するというのは、方針としてはあながち間違っていないともいえます。

また、世中研がすんなりとオーケーをして下った背景には、世田谷パブリックシアターの演劇ワークショップが、「上手に、うまく演じる」ためのトレーニングではなく、自主性をもって子どもたちが話し合いながら、自分たちの伝えたいこと、考えていることを演劇のかたち

にまとめあげていくという、私たちが大切にしている方法論へのご理解があったからだと思います。私たちは「教育」を考えてそのような演劇のつくり方を提案しているのではなく、そのほうが面白い演劇になると思っているからなのですが、そのことは次ページに収録した座談会に譲り、そうした私たちの考え方と先生方の考える教育的なねらいとの親和性が高かったともいえるでしょう。

いずれにせよ、現在、運動部の活動のあり方や顧問制度などをめぐり、部活動の新しいかたちが模索されています。世田谷パブリックシアター演劇部は、子どもたちの未来を学校教育からだけではなく、社会教育の側面からも地域が支えていくという部活動の新しいかたちを指示しているともいえるかもしれません。劇場が地域に根ざし、地域にひらくかれていく存在となることが私たちの目標です。

## 学芸スタッフが語る、 劇場に中学生演劇部があることは?

「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」は、学校と同じように1年間を一期、二期、三期に分けて実施しています。今号で紹介している二期は、10月末～11月に行われる世田谷区立中学校演劇発表会(区大会)で上演する作品の制作に毎年、励みます。本座談会では区大会での発表を終えたばかりの学芸スタッフに、中学生演劇をめぐるあれこれについてお話を聞きました!



恵志美奈子(えっしー)



九谷倫恵子(くたに)



田幡裕亮(たば)



福西千砂都(ふく)

### —なぜ劇場に 中学生演劇部があるの?

えっしー◆「学校の部活動のように、一年中、中学生が演劇活動ができる場があったらいいね」とはじめたのが、「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」です。世田谷区には区立中学校が29校あるんですが、演劇部があるのは9校だけなんです。学校に演劇部がないと、中学生の場合は演劇をするきっかけがあまりないから、劇場が機会を提供できたらって思って。

ふく◆ある中学校で演劇部の顧問をしている先生は、「演劇部は、基本的に子どもたちの居場所だと思っている。学校に来られない子が、部活から来られるようになれば」って仰っていたけど、授業は受けずに部活に来るという子を、学校としては認めにくいという場合もあるようなので、劇場の演劇部が地域における子どもの居場所にもなるといいですね。

えっしー◆あとは、劇場が演劇部をつくることで、現在進行形で行われているいろんな演劇のかたちを子どもたちに提案する機会になればなど。私たちが知る限り、中学生の演劇は「戯曲ありき」で考えることが前提になっているようと思うから、戯曲なしに演劇をつくっていくやり方とか、ストーリーを追うことに依らない演劇づくりを特に提案したいかな。

ふく◆私たちも最終的には技術さんとの情報共有のために台本に書き起こすんですけど、できたものを文字化するので順番が逆なんです。

には、劇場とも仕事をしている進行役が外部指導を行っている学校もあるから、「戯曲ありき」ではないつくり方をしているところもあるけど、全体的にはまだまだ少ないですよね。

くたに◆戯曲がオリジナルという学校も多いけど、「はじめに本ありき」と思っているね。

ふく◆私たちも最終的には技術さんとの情報共有のために台本に書き起こすんですけど、できたものを文字化するので順番が逆なんですね。

### —区大会での作品は、 どうやってつくられたの?

ふく◆まず、参加者全員でやりたいことを話し合いました。でも、みんなやりたいことがありすぎて。上演時間に限りがあるし(20分)、オムニバスという形式でいろいろ盛り込むのがいいんじゃないかと、まず決まりましたよね。

くたに◆そうね。でも、好き勝手にオムニバスをやっても抛り所がないので、背骨となるテーマを決めよ

うと、学芸スタッフ、中学生、進行役でプレゼン会議をどんと開いて、喧々諤々の話し合いをやりました。最終的には、進行役のなおちゃんが提案した「たたかい」というテーマが採用されたんだけど。なおちゃんは、「ワークショップをやる中で、子どもたちが戦かっているんだなってことを実感したから」って。たば◆子どもたちからも「学校内の争い」とか、「ゾンビ」をやりたいという希望が出ていたし。ワークショップ後の進行役と学芸スタッフの打ち合わせのときにも、「戦いが出てくるシーンになると、子どもたちが活き活きとやるから、『たたかい』というテーマはいいんじゃないかな」とて話していましたね。

くたに◆あと、進行役からの当初の希望として、中学生くらいの年頃の子は声や身体をうまく使えていない感じがあるから、ミュージカルをやって、がんがん歌ったり踊ったりしたら、自分のからだに意識的になって面白いんじゃないかっていう提案もあった。だから、オムニバス形式のミュージカルで、テーマがたたかい。この3つで作品づくりがスタートしたね。たたかいというテーマは、私の目からも、子どもたちが前向きに取り組めるような気がしたし、フ

アンタジーだけでは済まされない、日常生活とリンクするようなところもあって、取り組み甲斐があるなって思った。

ただ、家庭や学校生活で、悩みを抱えている子たちもいるから、掘り下げ方によっては無意識のうちに傷に触れてしまう可能性があって、あえて立ち向かおうということならいいんだけど、その覚悟も用意もないと危険だから、そこは気をつけようと進行役と話しましたね。

最終的にできあがったのは6つのショートピースからなる作品。中島みゆきの曲(『ファイト』)で踊るシーンからはじまって、「ゾンビ」「哲学1」「巣流島」「哲学2」「電車」とシーケンスが続きます。

「ゾンビ」のシーンは、ゾンビに囲まれた子が手榴弾を投げてゾンビを道連れに死ぬというところで終わるんだけど、つづく「哲学1」のシーンは全員が倒れている中から一人が立ち上がって、「これって不謹慎じゃない?」って問うところではじまる。「公共の、発表の場で、バタバタと人が死んで、こんな演劇やっていいの?」って。それに対して「ゾンビだからいいじゃん」「ゾンビならいいの?」みたいな、誰なら殺してはダメで、誰ならよいとい

う対話になっていく。

ふく◆その問い合わせは、「ゾンビのシーンをやりたくない」って言ってた子にやってもらうことになつた。彼女がWS中に疑問に思ったことを観客に問いかけるシーンにしました。

たば◆中学生たちのセリフは、彼らがWS中に即興で話し合った内容を整理して構成しています。初めてこのシーンを観る人にも議論の中身が伝わるように、このひと言は絶対に言おうとか、そういう整理はしたけど、基本的に本人たちの会話をそのまま舞台にあげています。

くたに◆その「ゾンビ」のシーンで「こうなったら道ずれにしてやる!」って叫ぶセリフ、あれ、本番だけ「こうなったらみな殺しにしてやる!」に代わってさ。私は心臓が痛くなつたんだけど……(笑)

ちなみに「巣流島(武蔵と小次郎が決した島)」のパートには〈男子篇〉〈女子篇〉〈みんな篇〉があつて、〈男子篇〉は男の子たちが楽しそうにチャンバラをしていて、〈女子篇〉は女の子たちが「私、マカロンつくったの」みたいな女子力を競う。〈みんな篇〉は進路や生活態度をめぐる親や先生との会話があつたりして、ステレオタイプなところも





あるけど、みんなのびのびと演じていたよね。

#### ——「たたかい」というテーマの中学生演劇。配慮したこと？

くたに◆子どもたちが演劇で「死」とか「たたかい」とかに取り組む場合、どうあるべきなのかということは常に考えているけど、正直、封じるべき表現というものがあるのか、あるとすればそれはなぜかというのには、悩むところだったりする。以前、小学生のWSで童話を取り上げたときに、子どもたちが童話の中で描かれている死を楽しく演じたり、気軽に扱っていることに対して親御さんから指摘を受けたことがあって。

ふく◆「気軽に扱ってはいけない」と言われると、真剣に考えればいいのかなって思うんだけど、一見気軽に「死ぬ」という言葉を使ったり、「死ぬ」演技をしたい子どもたちの気持ちを否定するのも、大人のエゴというか、道徳心の押しつけというか。もちろん、気軽に扱うのが嫌だという子どももいるし。いずれにせよ、どんな考え方の子どももワークショップの現場で自分がなにをどう感じているか言えたらいいですね。

たば◆中学生だって、死ぬということを一つのイメージで共有しているわけでもないので、どういう価値観をもっているのかとか、死をどう考えるのかみたいなことを、今回

ブダウンにならない関係性を、ふだんからつくるようにしないと。えっしー◆私たち学芸スタッフも、一緒につくっているチームの一員として対話をしていくという態度が重要だよね。一人ひとりがその場にいる責任を持つっていうか。

あとは、死に関していえば、中学生が表面的に軽く扱っているように見えても、本当に軽く扱っているのかはよくわからないかな。中学生ってなんかほんとに、外の様子からだけからでは推し量れないもの。あと「いまの時代は死を軽く扱うようになっている」としたら、それは私たち大人がつくっている社会の問題でもあるから、中学生とか子どもたちのある部分だけ取り出して俎上に載せるまえに、現代社会そのものを見直す必要もあって。

#### ——どんな部分を大切にして、中学生と向き合っていますか？

くたに◆そのままの魅力がそのまま舞台で發揮されることかな。「あの子、あそここの場面で出ていた子だよね」となるのは、観た人の記憶に残っているからだよね。だから、「この子がいちばん輝ける場所はどこかな」みたいなことを考える。

えっしー◆私は全員が納得してやっていることかな。上手い下手はあっ



ても、迷いがなくて全員が納得していると、表現としても強くなって面白い作品になるからね。

くたに◆本人たちが苦しんで演じるのは望まないから、面白さのために強制することはないね。

ふく◆そうだね。えっしーが言った「納得していることに強さが宿る」という発想に立って、そういうことはしないね。そして、納得して演じていたら、観てる人たちもなにか受け止めてくれるかなと思います。私はそのことも目指しているかな。

たば◆うちのワークショップって、その場にいる人は「いない」わけにはいかないんです。「全員いないといけない」という状況をつくる。ワークショップの間、ずっとなにも話さなくても、たとえば3日間のWSで間の1日を休んでも、残りの日程はもう来られないって決まったとしても、それまでいたことに変わりはないからねって。

えっしー◆個々の人生においてタイミングって違うから、参加している子がみんな同じように張り切って前向きな感じでそこにいなきやいけないとは思わない。そういう子のほう

が評価されやすい風潮はあるけど。話したくない子が話さない、でもここにいたいっていうならそういう居方もありだと思う。話せないんじゃなくて、話さないことにその子が納得して、でもここにいたいというの

であればね。それは、その子がそういうようにその場に居ることを、ほかの子どもたちが受け入れるということもあるけど。

#### ——中学生演劇における作品の質って？

ふく◆今年は学校の学芸会・学習発表会支援に久しぶりに通い詰めているんだけど、学芸会って子どもの成長のためのものなんだって改めて思いましたね。協働作業に主眼が置かれていて、協力し合うことでの人格形成とか、そういう側面に光があたっている。一方で劇場の演劇部では、演劇の質を上げることも重視していると思う。

くたに◆先生が第一義に考えているのは子どもの教育であって、演劇の質を高めることではないから、そこは念頭に置いておいたほうがいいと思う。

ふく◆演劇の質を高めるために子ど

もを使いだしたら、それは先生としてアウトな気がするし。つまり、極論ですけど、おもしろい演劇をつくるとするあまり、それをつくる子どもたち一人ひとりの存在を無視して、コマのように使おうとしたら、それはちょっと違うかなって。むしろ、私は、演劇の質を高めていくことと、ワークショップに参加している一人ひとりを大切にするということは矛盾しないと思うんですね。

えっしー◆作品の質について語るのは難しいけれど、伝える側（演じている人たち）が「伝えたいことを伝えられているか否か」という尺度もあるかなと思う。プロの俳優は身体的にも技術的にも、伝える訓練をしている存在だけど、それまで演劇をやってきていない人が、演劇というメディアを使って人になにか伝えようとすると、その人の中で腑に落ちていなければ、表現として空回りしちゃう。そうすると観ている側には伝わりにくくなってしまう。ある意味「質が低く」なってるともいえるよね。

だから、一般の人たちと舞台をつくるときは、最終的に一人ひとりが納得して腑に落ちている状態をつくることが重要だと思っているかも。



それは「個々が納得していないときは、そのことをちゃんと言える場をつくる」ということでもあるけど。

あとは、「個々が思っていること、共感できること」から演劇をつくることも、一人ひとりが腑に落ちやすい状態をつくると思ってる。その人たち自身が考えていること、WSを通じて発見したことから演劇をつくれば、ぶれにくく、観る側は受け取りやすい。そういう意味において、個々が大事にされることも演劇の質に関係してくると私は思うな。あと、そういうつくり方をすると、必然的にオムニバス形式で個々のパートを責任もって担当するというやり方にはなりやすいよね。

くたに◆それは多分、ハンナ・アーレント（1906～1975年、ドイツ出身の哲学者、思想家）の公共論に近くて、「一人ひとりがかけがえのない意思をもった存在だから、その人が封殺されてしまうと、この世界から一つのアイディアが失われる」という発想だと思う。その意味において、その人はその人であることが尊重されるよね。それが前提であり、目指される公共性なんじゃないかな。

えっしー◆そうだね。私の場合、もともと場としての公共劇場とか、どうやって公共がつくられるかに興味があった。だから、私が気にするのは、地域に住む一人ひとりの価値をどうやって引き出したり、受け止めたりするかっていうことなのかも。例えば、地方の公共ホールが美空ひばりを呼ぶのは、「大勢が喜ぶもの」を公共と捉えているわけで、アーレント的なところでいえば、それは公共ではないっていうね。

くたに◆そうすると1万人にひとりの難病の子は助けなくていいってことになりかねないからね。私たちは、そういう子を助けるために公共という概念があって、「パブリックシア

ター」があると思ってる。

たば◆僕、高校のときに演劇部に入っていたんですけど、女子が圧倒的多数で、男子が少数だったんですよ。

そうすると、僕みたいな団体の大きい男子がなにを言っても、まったく届かなくて多数に負ける。僕としては自分の意見を採用してもらいたいわけじゃなくて、聞いてもらいたかったんですけどね。僕がいまも演劇を続けているのは、その経験が根底にあるのかも。つまり、自分が伝えたいことを工夫できる現場が演劇はある。

くたに◆今回、作品タイトルは中学生が決めたんだけど、みんな話し合いをするのがすごく上手になっていたよね。多数決を探るけど、それは状況を把握するための多数決で、そのうえで話し合う。賛成が少ないと、その意見を消しちゃうようなことはしないの。「ここここは一緒にできるんじゃないか」とか、「こっちなら妥協できる」とかね、苦しみながらも上手に話し合いをしてたよね。

#### ——演劇を通して、子どもたちに手渡したいものとは？

くたに◆私が持っているある種の強制的なことでいうと、基本的には「意思を表明する」ことをよしとする方向はあるかなと思うよ。今まで感想すらしゃべれなかった子が、自分から手をあげる瞬間とか、誰かが積極的になったとき、なんとなく喜んでしまうっていうね。「こういう人の在り方であってほしいんだな、私は」って気づく。

ふく◆なにかをつくるときに、誰かが意思を表明してくれないとはじまらないと思っていて、それは演劇もそうだし、世田谷という地域で何かをやろうとするときもそう。だから勇気を出して、自分の意思を表明してくれた人たちのことをいいなって

思ってしまうくらいは私もあります。くたに◆世田谷が市民活動の活発なところであるという背景はあるかもしれません。

ふく◆あと、表明するばっかりじゃなくて、聞くことも大事だと思うから、表明してばっかりの子には、ちょっと聞こうって言うかも、自分自身に対しても言えるけど（笑）。

えっしー◆だけど、私は市民活動をしたり、立場を表明しない人たちに興味があるかもなあ。演劇とかに興味がなさそうな人たち。そういう人たちが演劇をやると面白いかなと思うし。ちょっとあのじゃく的な考えになっちゃうけど。まあ、結局は、社会の多様性がそのまま参加者のグループにも表れると思つていて、そういう多様性を受け入れるグループでいてほしい。だから、なんか、私たちスタッフも各々の個性を活かした感じで現場にはいるよね（笑）。

ふく◆子どもと接するときはちゃんとしないって昔は無意識に思っていたんだけど、たばちゃんが「子どもにとって、こういう変な大人もいるんだっていう出会いが大事だから」って話していく、ああ、そうだなって思った。

くたに◆親戚から「演劇をやっている人たちって、変わっている人が多いでしょ」と言われるんだけど、多分、「変わっている人」ってどこの世界にもいて、演劇というのは、変わっている人を面白がれる、素敵な表現として受け止められるジャンルなんだと思うんだよね。

ふく◆「変わっている」という言葉は難しいけど、少なくとも自分とは違うな、ズレてるなということを面白いと思えるのは、貴重な場だよね。

（2016年11月17日、  
世田谷パブリックシアターにて）

## 演劇を体験して感じたこと

まさる（「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」参加者）

僕は今回初めて演劇を見るのではなくて、いち（初め）から演劇を作るというとてもいい体験ができました。

その中から2つほど体験を書きたいと思います。

僕は、もともと、人の前に出て演じたりすることが大の苦手でした。そんなある日、母に勝手にワークショップに申し込まれました。今回のワークショップに、いざ行って見ると、すごく緊張してしまっていたことを今でもよく覚えています。

最初にダンスみたいな演劇みたいなものをしました。その時は他の人がどんどん意見をいっていて自分の意見はなかなか言えませんでした。しかし、進行役の方が「意見を言ってみ」と言ったので自分の意見を言いました。

普段の学校生活であれば意見を言っても、すぐに却下されたり無視されたりして、なかなか意見が通りません

でした。

でも、セタバブでは自由にみんなが意見を述べていたので、ここはなんてばららしい所なんだと思いました。

二つ目は区大会の本番を体験したことでした。あんなに大きな舞台に立つのは初めてでした。リハーサルでステージに立った時は、緊張しすぎてその日の夜は寝むれず、一晩中、自分の中でリハーサルを何回もしました。そして迎えた本番。舞台に立ってスポットライトをあびた瞬間からすごい自信があふれてきました。この体験で、ぼくの中の何かが変わりました。受け身ではなく自発的に自信を持つことが大事なんだとと思いました。

今回のことを通してぼくは、どんなに大人が手伝っても、ぼく達がやる気にならなければいい作品はつくれないのだなということも分かりました。

これからもがんばっていきたいと思います。

## 中学生の話し合いはいい線をいく

まや（「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」参加者）

15年と16年の2回、二期に参加しました。

今回のワークショップでは、「たたかう」ことをテーマに演劇をつくりました。テーマ決めの段階から、ゾンビを出したいとか学園物がやりたいとか、よく分からぬけどなんだか大変。パブリックシアターの話し合いは愉快なので好きです。

今回のワークショップを終えて思ったんですが、学校とか普段の場での話し合って緊張するんです。正解の結論を出さなきゃいけないような気がしちゃうから。

でもパブリックシアターの話し合いは、その緊張のきっかけというか、余計な気遣いみたいなものが、良い意味でうやむやになってると思います。みんな勝手にしゃべるし、最初は緊張しても、段々と力が抜けてゆるくなってくる。話してるうちに自分の意見が変わってくることもあって、それはそれで面白いんです。

私の場合は、相手を説得しようとして自分の考えを説明してたら、「あ、私こんなこと考えてたんだ」ってな

って。構想途中みたいなレベルの考えでも口に出していくんだって気づいて自分でびっくりしました。

あともう一つ、印象に残ったのが「大人よりも、子供よりも強いものは何か」という話をした回です。結局は「権力」って話になったんですけど、途中で「赤ちゃん最強じゃね？」って言った人がいて。

その後私が全然関係のない本を読んでたら、そこに「社会的に最も強い立場にあるのは赤ん坊である」みたいなことが書いてあったんです。その考えが正しいか正しくないかは別にして、中学生の話し合いはこんないい線いくんだなって思った。大人が一生懸命考えるのに引けを取らないぐらいのエネルギーがあるというか。大人をバカにしてるわけじゃなくて、中学生の話し合いすげえなって思ったんです。

自分だけでは分からぬこと、行き着けない答えが話し合うことで見つかる。わくわくします。これからも参加していきたいな。



# 中学生をナメてはいけない

金谷奈緒（演出家／青山ねりもの協会）

世田谷パブリックシアター演劇部中学生の部第二期。私自身は、2014年にアシスタントとして参加したのちに、15年、16年は進行役として参加しました。最近終えた16年度では、3年間にわたり参加しつづけた中学生が晴れて卒業を迎えるなど、まさしく学校の部活のようなことも起きておりしています。

15年、16年のWSの最初は「この限られた期間で、このメンバーで、何を、どうやって、いい感じに、やっていこうか？」という、本当に根本の部分を皆で考えることからいつも始めていました。まるで、企画会議のような状態です。なんだか部活というよりは劇団のようだなと感じる時もあります。

私が初めて参加した14年は、「お金」というテーマが最初からほぼ決まっていて、それを中学生たちに提案していくかたちだったのですが、創作の中で彼らを感じている面白さや、やりたいことと、大人の我々を感じていることとの間に「違い」がかなりあって、お互いにそれを共有する時間がもっとほしいなと思いました。そこで、15年、16年は回数を増やしてもらい、作品について話す時間を多くとることになりました。

かなや・なお／埼玉県出身。高校在学中に青山ねりもの協会を結成し、主に企画・創作・演出を担当。大学在学中に国語科教員免許を取得。現在は演劇をやりながら国語の先生もやっている。

中学生たちは実際に深く考え、実によくしゃべります。もしかしたら、家や学校ではこんなにしゃべっていないかもしれませんし、世田谷パブリックシアターの場がそうさせているかもしれません。たまに、どうしても言葉にするのが難しかったり、話を聞くのが苦しくてしまうがない状況になることもあります、それでも作品のために対話し続ける彼らの姿を見ると、私はいつもウットリてしまいます。と、同時に、中学生をナメてはいけないと毎回、思い知られます。彼らがマジだから、私たちもマジでなければ失礼にあたります。当然、その逆もまた然りだとも思っています。

しかし、いくら創作の場は平等・対等だと心がけていても、大人が考えることと子どもが考えることは全然違うので（というか、大人とか子ども以前に、人によって違いがあることは当たり前ですが）、散々話しても分かり合えないことがあります。

例えば、話をする中で、「台本（ひとつの物語）をやりたい」という声は、毎年、中学生たちから多く出でています。私のほうも、「あえて台本はやらないんだ！」というわけではないのですが、近年はずっと、台本のない集団創作を行ってきました。皆でやりたいことを探し、そ



れに見合う本を探したりしていると、どうしても時間がかかりすぎる。とはいえ、時間がなくとも、やる術をみつけることは、皆がいれば可能だと私は思っていますし、かといって集団創作の素晴らしさも捨てがたい、ということも全力で伝えつつ、お互いの価値観をすり合わせながら、ベストな表現を皆で探しつづけています。そもそも、そういう「違い」が、面白い演劇のはじまりであるとも私は思っています。中学生の気持ちになることは無理です。その逆もきっと無理です。でも、身体と心を使って「考えてみる」ことはできます。だからこそ、子どもたちの考えを大人のものに寄せるではなく、その逆でもないやり方で、一緒に演劇をつくっていくことは可能であると私は思います。

恐らく、このようなやり方は、中学生たちにとってはつらい時間も多くあります。しかし、彼らはきっと、なによりも、区大会という発表の場に「期待」をしているのだと思います。何を期待しているのかは、それぞれに違います。多くの人に自分を承認してもらいたいと話す人や、将来の夢のためや、内気な性格を直すために舞台に立つ経験がしたいという人。とにかく楽しいことがしたい！という人もいます。なんにせよ、彼らにとって区大会という場は文字通りの「一世一代の大舞台」であり、なにかららの「希望」に満ちあふれた場になっているのかもしれません。それはきっと、ほかの学校の演劇部の中学生たちも同じなのではないかと思っています。





## 世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財)せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター(約600席)、シアタートラム(約200席)の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター（主劇場）



シアタートラム（小劇場）

## 世田谷パブリックシアターへのアクセス



## お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階  
Tel. 03-5432-1526 (代表) Fax. 03-5432-1559  
<http://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅前にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。